

「伊京集」の言語

柏原, 卓
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/12162>

出版情報 : 語文研究. 35, pp.39-48, 1973-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「伊京集」の言語

柏原 卓

1 はじめに

節用集については、橋本進吉博士・山田忠雄氏の研究を始め種々研究がある。⁽¹⁾私の研究は、慶長以前の古本節用集の言語面の研究である。近世板の節用集は山田忠雄氏の報告された如く余りに多数なのでおく事として、当面古本に限定する。古本節用集の外形からの研究は、橋本博士等により詳細になされている。しかし、内容・言語面の研究は少い。私は古本節用集諸本の言語研究をめざし、今その途中にある。古本節用集諸本の言語は、例えば、文明本は漢吳音の書き分け・不濁点・長文の漢文注記に対する振り仮名が有って、字音・音韻・訓読語の研究に有用であるとか、正宗文庫本は傍訓・清濁表記とも詳しく正確で、当時の表現・発音にかなり忠実な表記も多いとか、明応本は濁点が少なく特殊な語音のゆれが見られるとか、黒本本は濁点が詳しく語義の注も多く、書簡・文書に用いる「候」が見えるとか、と言う工合に各々特色がある。三十種を越えるこれら諸本の一つについて言語面の研究をして行くが、本稿で全

て扱ふ訳には行かないので、本稿では古本の中の古本と目され従来内容研究の発表されてない「伊京集」につき述べる事とする。

2 従来の節用集観

節用集と言えば「通俗的な伊呂波引き漢字辞書」と言うのが橋本博士以来の通説である。佐藤茂氏は、

和訓と漢字との面からいへば、名義抄、字類抄のグループと節用集（一往、当面は古本として）を中心とする通俗辞書のグループとの間に相当の断層ともいふべきものを感じる。（中略）節用集の編纂に際し相当の選択が行なはれたであらうと考へる。（中略）この選択といふ仮定が許されるならば、そのメドは所謂当節の用のためであることは当然であらう。

と述べ⁽²⁾、訓点語学者でもある中田祝夫氏は、

節用集の語彙をながめていてわたしの感じたのは、これが現代語もしくは近世語の問題点に相わたるところの多い事実、さらには現代の各地の方言と密接な関係にある言語の多い事

実であった。

と述べ、それは、節用集が「中世後期の通俗語集成である」から「当然すぎる事実である」と述べておられる。⁽³⁾
ところで、節用集には異本が多いから一律に「通俗的」と割り切れるものかどうか。慶長以前の古本ともなると古い要素の残留が有るかも知れないから疑問の残る所である。

古本節用集の一本に「伊京集」(古写本一冊、旧帝國図書館蔵)というのがある。付録が「京師九陌」「十干十二支」の二つしか無く語数も少ないから、「国語学辞典」では正宗文庫本・大谷大学本・増刊下学集及び、龍門文庫の二本に次ぐ古い本とされている。橋本博士・新村出氏も近世以前に相当する古い本と見られる。⁽⁴⁾又「伊京集」はこの様な古い本であると共に、書名が異様である点も興味を引く。この「伊京集」を調査した結果、内容上「節用集の『通俗的』とのみ言い切れない点が見られた。以下、節用集の所謂通俗性というものを再検討する企図の下に「伊京集」の仮名遣・語法・語彙をめぐって述べる。

3 仮名遣

節用集では漢字で書かれた語の右(又は左とか下にも)に、仮名で読みが施してある。そして語の右に施された仮名の最初の一字により、イロハ以下の部に語を属させている。「伊京集」の仮名は異体はあまり多くない。

せ・子・一

が主たるものである。「寸」「𠂔」も見えるが、例外的であり何らかの文献から写したものと思われる。

3-1 「イ・井、エ・エ、オ・ヲ」の仮名遣

「伊京集」は「イ・井、エ・エ、オ・ヲ」の各部を「イ、エ・ヲ」部に倉せているので、既に「イ」と「キ」等の発音上の区別が無かったと知れる。但し、これらの使い分けは仮名遣は語毎に決まっているらしい(それが歴史的仮名遣や定家仮名遣いに合っているか否かが問題になるが、今は言及しない)。同一語で仮名遣の乱れた例は少数で、
夷曲エリキョク、夷中人エリナカノヒト、夷翁エリウ、塞翁馬サイウマ、翁伯ウウハク、
所翁シヨウウ、卒翁ソツウ、塞翁馬サイウマ、翁伯ウウハク、
東夷トウエイ、エヒス、エヒス、
胡コ、
くらいしか無い。

3-2 開合

中世は才段長音の開合の別が大体保たれながら一部の語に混同が見え始める時代である。「伊京集」には開合の混乱を反映した例はあまり見えない様で、
飾ヅクリ・料理リョウリ、
豆腐トウフ・豆麩マユ、
桑螺サウロ、
方円ハウエン、方文ハウモン、孔方兄コウホウケイ、
くらいである。この内「シツラフ・シツロウ」は別として、他

は単純な混同と言うより、「或る種の復古意識」がからんでいると思われるものばかりである。その説明を以下に述べる。
321 「豆腐」を注記まで示すと、

豆腐トウフ 或曰白壁又云唐布トウフ 豆麩同(41・6)

の如くで、「豆麩」と同語と知れる。そして「又云唐布」の注があるが、「唐」は勿論開音である。節用集諸本も「タウフ」とし、「伊京集」のみ「トウ」も載せる。日葡辞書も「タウフ」と開音である。問題の「豆」は、韻鏡の三七転一等候韻に属する字

で合音の筈。「康熙字典」によつて諸書の音注記を調べても開音のものはない。唐音資料でも合音である。「唐納豆」も「トウ」で「豆」を「タウ」と記す語は他に無い。結局、当時「豆腐」に限り開合が乱れていたと見られる。すると「伊京集」の「トウ」は慣用に合わず、規範的仮名遣かと思われる。

322 「桑蠶蛸」は「イボウジリ」が正しい。誤まれる回帰の例と考えられる(後述「疑問訓三題」参照)。

323 「方円」「方文」と「孔方兄」。「方」は陽韻だが、「方角」の意はハウ。「四角」の意と「医方」とがホウ」と書く慣用が有つた事が知られている。「伊京集」では「四角」の意はこの三語しか無いが、前「語まで右の慣用でなく正用」に合う。又、「孔方兄」は諸本「ハウ」で、黒本本と「伊京集」に「ホウ」があるのは例外で、その理由が難解なので棚上げにし、前二者に「方」の開合の慣用と異なる規範的表記が見える。以上の諸点を考慮すれば「伊京集」の開合は大概古用に合い、混乱は殆ど無い」と言える。

3-3 四つ仮名

中世後期から四つ仮名の区別が乱れ始めるが、「伊京集」の

誤りの例は

カウシカウシ ナメクシナメクシ タジマタジマ
麴カウシ 蠶ナメクシ 蝸タジマ

くらいである。前三者は、文明・明応・黒本本の様な古い本でも誤つたのが多いから「伊京集」独自の誤りではない。逆に、「襦」は天正・饅頭屋・易林本等後世の本(と黒本本)に「シタウズ」と誤るが、「伊京集」は文明・明応本と同様正しく「ヅ」としている例もある。要するに「伊京集」は四つ仮名も殆ど

古用に合い混乱は僅少である」

3-4 その他の復古的仮名遣

「伊京集」には、語中の漢字音を復原表記する一所懸命キチハチ(1・4) 一八キチハチ(2・8)の様な表記や、

強面(49・3) 挨拶トヒサツ(91・4)

の如く、語中尾の「イ」を「ヒ」表記する例が多数見える。かかる仮名遣も「復古的態度」に基くと考えられる。

以上の様に、中世を通じ漸く進みつつあった「開合の混乱」「四つ仮名の混乱」をあまり反映せず、復古的態度に基くと考えられる仮名遣も見える等、保守性が主要面の如くである。

4 語法

次に、指定辞や活用形につき通俗的かどうかを検討しよう。

4-1 指定辞・形容動詞語尾

これらは「ナリ」「タリ」である。「瑞ツマヒラカセ」の様な表記も有る。指定辞は注記の文末に「也」「之」と書かれる事が多い。

口頭語なものは

碩学ハ大也智者ヲ云フ(125・9)

を除き見あたらな。「チャ」「ナ」等は見えないのである。

4-2 動詞の活用

「伊京集」には四百語余の動詞が有り、殆ど終止形である。

中世は二段活用動詞の一段化が起こつた時代であるが、「伊京集」には
駈ハル(10・2) 布フ箭ヤ(70・4) 茹ユ(103・2)

の三例しかない。これを、古い本である「文明本」に於て一段 アタ(ヱ)ル 16例 …二段 アタ(フ) 16例

アタフル 4例

の例を始め大量に一段化形が現れるのと比べると、「伊京集」は二段活用動詞一段化の進行を殆ど反映してないと言えよう。

只、中世に連体形が終止形を包摂する過程を反映して、連体形登記語が四十語くらいある。

サ変 臍キヌム 十変 去イヌル

上二段 北ニアル 届トク 拓サバクル 栲コシラル 等

の如くである。

43 形容詞

形容詞は百語弱であるが、「忙敷イソカシ」の様に終止形が多い。連体形イ音便の例に「強顔ツヨカ・難面ニガハ」「題哉トヒナ」「任カミ」が有る。音便は実際はもっと多かった筈だが「伊京集」には現れない。これも辞書と言う性格によるものであろうか。

5 語彙

以上、辞書に語彙を盛る際枠組みの一種となる仮名遣・語法の面で、中世の音韻・語法上の変化をあまり反映してない事に触れて来た。次に語彙の性格について検討して行く。

2 の最初に紹介した様に、節用集と言えば「通俗的」だと考える事が多い。これは一応理由の有る事で、古本節用集には「俗」「世話」等と注した語や、俗語臭のする語が幾つも採られている。「伊京集」についても

○印地 倭俗・五月五日 イツシカ 倭俗
 ○塗籠 土民 戴ツラ田夫之
 ○濕鼠 鼠ネズミ所言ノコトニサツカラス 鼠ネズミ 糞ノコ 糞ノコ 糞ノコ 糞ノコ

と言う工合に多々上げられる。名義抄等に比べれば現代語に近い、俗語的な感じがして来る。しかし、この「感じ」が曲者であり、語彙の性格を知る為には更に詳細な検討が必要である。
 「伊京集」の所収語は約五二〇〇語で、一七％にあたる約九〇〇語は、文明・正宗・明応・黒本・饅頭屋・天正・易林の諸本に見えない。その大部分は「伊京集」に於ける増補と考えて大過ないだろう。この一群の語を仮に「増補語」と呼ぶ。

○肆 公稚 (4・9) の如き訓読文
 ○正哉吾勝々速曰天忍穂耳豊 70・10) の如き神名の様な「非日常語」が多い事である。

更に精査してみると、「中世の辞書類に見えなくて、類聚名義抄・色葉字類抄・和名抄等の前代の辞書に見える語がかなり多い」事が分かって来た。それらの一部(ア行)を次ページの表に示す(「その他」には、新撰字鏡(新)・字鏡集(字)・下学集(下)・温故知新書(温)・運歩色葉集(運)・倭玉篇(玉)等に該当語が有れば記す事とする)。

表に見られる様に、「増補語」の中には、節用集諸本や中世辞書類(下学集・倭玉篇等)には見えなくて、却って前時代の辞書類に見える語が、かなり有る事が分る。就中、類聚名義抄に見える語が多い(乙表参照。甲表も)。

〔甲表〕

語名	書名	名義抄	字類抄	和名抄	その他
蕪芥	伊京集	蕪芥アタケバカリ	蕪芥アタケバカリ		
淋灰	伊京集	淋灰アタケタル	淋灰アタケタル	淋灰 <small>（和名）</small>	淋 <small>（字・温）</small>
麻痺	伊京集	麻痺アツクノヘナ	麻痺アツクノヘナ	麻痺 <small>（和名）</small>	
和市	伊京集	和アマツ	和市アマツ		味アマツ <small>（字）</small>
茶	伊京集	茶イカリツナ	茶イカリツナ		茶イカリツナ <small>（字）</small>
味	伊京集	味イナヤ	味イナヤ		味イナヤ <small>（字）</small>
魚丁	伊京集	魚丁イホノカシラ	魚丁イホノカシラ	丁 <small>（和名）</small>	
訥	伊京集	訥オホク	訥オホク		
断	伊京集	断オホク	断オホク	断 <small>（和名）</small>	断 <small>（字）</small>

〔乙表〕

語名	書名	名義抄	字類抄	和名抄	その他
百足	伊京集	百足アマヒコ	馬陸アマヒコ	百足 <small>（和名）</small>	
陣	伊京集	陣タカカワ	陣タカカワ		
崎嶇・阻	伊京集	崎嶇			崎嶇 <small>（和名）</small>
遛	伊京集	遛			遛 <small>（字）</small>
躑躅	伊京集	躑躅			
論	伊京集	論			論 <small>（字）</small>
可笑	伊京集	可笑			可笑 <small>（字）</small>
賢	伊京集	賢			賢 <small>（字）</small>
小妹	伊京集	小妹			

共通の語が有り似ている、と言っても漠然としているので、次にもう少し積極的に「名義抄と伊京集の影響関係」を思わせる語を上ずる。

「誑」と「鋌」

「ヲコツル」の意味は「うまい事を言ったり、したりして人をあざむき誘う。また、御機嫌をとる。とり入る」であるが、一方「誑」の意味は「博雅」問也。「玉篇」衆多也」（康熙字典）で「問う」「多い」であり、名義抄に「イマシム・ヲシフ」の訓も有る。いずれにせよ「ヲコツル」の意味と「誑」の意味は齟齬し、「伊京集」以外には見えない例である。この表記がなされた原因を調査してみると、名義抄に

誑（注略）▲（注略）誘オコツル（法上五二）。▲は改行）と有る。この様なものを見て、位置の接近と字形の類似の為に

「オコツル」と「誑」とを結びつけてしまった、と言う可能性が考えられ、単に漢字の書き誤り、又は誤訓と見るよりも説得力が有ると思う。もしこの考えが正しければ次に、右の事が起こり得るのは「誑」「誘」等言扁の字が類聚され、和訓が施された書物―面引漢和辞書の筈である。そこで、図書館本名義抄・字鏡集・倭玉篇等手近かの書を見たが、「誑」「誘」の近接したのは見えない。「伊京集」の作者が「観智院本名義抄」を見たか否かは断言できないが、少くも右記の部分がこの名義抄によく似た一書の影響下に在ると言えよう。

次に、「鋌」と「カスガヒ」の関係について。「鋌」を古辞書類で調べると

鋌ウツチル（字） 鋌カナツチ（伊呂波字類抄） 鋌アラカチ（玉）

の如くであって、「カスガヒ」の訓は見えない。又、「大漢和辞典」を見ても「かすがい」の意味は出て来ない。「鋌」の表

記は「伊京集」の他に見えず誤りと覺しい。かかる表記がなされた原因を調査してみると、やはり名義抄に

鉦テ谷正テ一テ蕪テチウツルリカ子テ鍵テ(音注略)カスカヒテ(僧上一一七)と有る。この様なものを見て、位置の接近と字形の類似の爲に

「カスカヒ」と「鉦」とを結びつけてしまった、と考へる事ができ、単に誤字又は誤訓と考へるより説得力が有ると思う。これも、中世以前の手近かの漢和辞書類には、「鉦」「鍵」の近接したものは無い。「伊京集」は「鉦」「鍵」の排列・記事の点で名義抄によく似た一書の影響下に在ると言えよう。

「姉アヒヨメ」と「姉アヒヨメ」と訓の有るのは「伊京集」の様に「姉アヒヨメ」二字で「アヒヨメ」と訓の有るのは和名抄・名義抄・色葉字類抄で

姉アヒヨメ逐理二反和名阿比良女(和)、姉アヒヨメ(名)
姉アヒヨメ(色)

とある。それに対し「姉」又は「媼」一字で「アヒヨメ」と訓の有るのは、字鏡集・倭玉篇・文明本・運歩色葉集・温故知新書等の中世辞書である。「伊京集」はこの点も中世辞書よりも名義抄・和名抄・字類抄に似ている。ところで問題は「音逐・勅流切」に有る。「音逐」からは入声、「勅流切」からは平声音が帰結される事は直に分る。そして「大広益会玉篇」に「姉直六切姉直六切姉勅流切とあつて「姉は、直六切(入声)なら姉の意味。」
勅流切(平声)なら姉の意味」である。「伊京集」には二重の誤りがある事になる。「勅流切」は「姉アヒヨメ」二字への注ではないし、「アヒヨメ」に入声で「勅流切」は不適である。この誤りの原因を調査してみると、名義抄に

姉アヒヨメ逐テ勅流反下上里▲(姉)媼アヒヨメ(佛中七)

と見える。「本来「一」媼」の項は、「一逐」の直後に来べきものだが、転写の際に独立した爲に、「一逐勅流反」が一続きになつてしまつたのだろう。「伊京集」に有る「アヒヨメ・音逐・勅流切」の注が備つて見える書は、名義抄以外には管見に入らない。「一逐直流反」は「姉アヒヨメ」でなく「姉」の注であるが何程かの影響を考へてよいと思う。猶、「勅流切」は「大広益会玉篇」の注が「姉アヒヨメ勅流切」と切れ目無く続いているから、又「音逐」は「集韻」「韻会」停六切並音逐の如きから、と考えられなくないが、二書を併看する程周到な人が前述の誤りに気付かぬとは考へ難い。やはり「音逐直流切(反)」と続け書き「アヒヨメ」の訓も有る名義抄の如きの影響を考へる方が考へ易い。

次に「姉アヒヨメ」は「伊京集」・名義抄・字鏡集に見えて後の中世辞書類に見えない(前掲「甲表」)が、「ヲソバ」の訓が問題になる。「ヲソバ」とは

鶴ニガム調ニガム齒ニガム於ニガム曾ニガム波ニガム齒ニガム重生也(和名抄卷三二)
とある様に「八重齒」の意味である。一方「斬」の方は

斬ニガム之名ニガム齒ニガム之肉也(和名抄卷三)

とあり「齒茎」の意味である。名義抄乃至「伊京集」の「斬」は、漢字の意味と訓の意味に齟齬がある。猶、字鏡集は表には省略したが「ハシシ・ハクキ」の正訓も有する。「伊京集」は「ニガム・ヲソバ・アギ」の三訓が一致する名義抄の如き書の影響を受け、誤訓を伝承したものと考へてよからう。

以上述べて来た様に、「伊京集」の語彙には増補が有り、「

増補語」の中には、「訓読文」「神名」等の非日常的言語や「中世辞書に無くて前代の辞書に有る語」がかなり多い事が分つて来た。上述の見方が是認されるとすれば、「節用集の通俗性」について語彙の面から詳細に再検討すべき余地が出て来ると考える。

例えば、前掲「甲表」へ「乙表」の中で、「崎嶇」の如きは訓点語臭が判然しているが、「小妹」の如きはそれ程でもなく、「伊京集」にあるから中世の語だろうと考え易いのではないか。しかし、中世辞書類に見えず名義抄に飛ぶのを見ると、「伊京集」の当時生きて使われていた語か否か疑問が生ずる。醍醐寺本遊仙窟康永三年(1344)点に見える様だが、点本であり時代も百年以上前であろうから疑問は解けない。表に掲げた語の殆どは同じ疑問につき検討を要するであろう。今、一々の語について解答を与える力を持たないので、後の研究を待ちたい。

本稿では、今少し別の典型的と思われる語を取り上げて「伊京集」の語彙の性格考を進めて行く。

6 疑問訓三題

前節に於て従来強調されなかつた「名義抄と伊京集の影響関係」に触れる所が有つた。これが認められる場合(或は疑問を持たれるとしても)、「伊京集」の中で従来の訓に疑問の有つたもの二三につき、名義抄との比定により、又は名義抄に導かれて、より良い訓に到り得たと私考するもの有る事を次に述べる。

ツフチクサ 馬蹄香 (476)
アツフカミ

この左訓が問題で、「アツフカミ」又は「フタフカミ」の様に見える。しかし、かかる語形は辞書類にも他の書物にも無い様で疑問に思つて来た。しかるに「伊京集」の「増補語」には名義抄と関係深い語がかなり有る事を知るに及んで、右訓「ツフネクサ」を頼りに名義抄を検すると

馬蹄云ツフチクサ (法上ハニ)

とあつた。「フタマカミ」の「マ」は古い仮名字体に「ア」が普通に見られるから「フタフカミ」と書いてある書物を見誤つて「フタフカミ」と書いたのであろう。第一字目は「ア」よりも「フ」に墨滴の付いた如く見えるが如何であらうか。猶、「馬蹄香 和名布多末加美」の如く、本草和名・和名抄等にこの語は見えるが、しかし、後の中世辞書類には見えない。

翁伯 文選 (276)

この語 本題に入る前に先ず、右側の仮名二字目の「ホ」は古めかしい異体の仮名で、「伊京集」には稀な例である。又、その場所は喉内韻尾で「ウ」と有りたいが、才段長音化の後にハ行転呼との類推から誤まれる回帰によつて「ホ」と表記したものの。かかる例は「伊京集」では他に無い。恐らく他の書物をそのまま写したのであろう。それが何かは未だ見出してないが、「文選」と注記があるからその訓読書か、訓点語集成の書物かであらう。しかし、当面の問題は左訓の「アツフチナキ」の方である。これも諸書に見えず疑問に思つて来たが、名義抄を検してみると

翁伯アツフチナキ (僧上九九)

と出ている。これを以て考えるに「ラ」と「ヲ」、「サ」と「

ナ」とは酷似しているから、「伊京集」の「アフヲヒナキ」は「アフヲヒサキ」の誤写であろうと思う。「古本節用集六種研究並びに総合索引」（以下「六種索引」と略称）には「アフヲヒナキ」の見出しが無く、私の読み方は如何であろうか。他の書物では、字類抄に「翁伯アフヲヒサキ」とあるけれども、後の中世辞書類には見えない。

イハウシリ
桑螺蛸(27)

この語、訓が野線に掛かって見づらいが「イハウシリ」と読めると思う（「六種索引」は「イハウレク」とする）。難解な語で「イハウシリ」とか「イハウレク」と書かれたものは他に管見に入らず疑問に思っていた。しかるに名義抄を検すると、

螺(蛸) オホチカフクリ (僧下一九)

とある。「桑」の有無が異なるが、「オホチカフクリ」の訓を頼りに更に他書を検すると、本草和名に

桑螺蛸一名蝕脱(注略) 蝗娘一名蛸蛸(注略。以下「一名何」が九種ある略) 螺蛸一名蛸蛸和名於保知加布久利(下14)と「桑螺蛸」が見える。又、和名抄に

蝗娘螺蛸(略) 一名蝗娘 和名以保 螺蛸一名蛸蛸 和名於保知 加不久里 付

とある。

「桑螺蛸」の字は本草和名に見え、又「伊京集」での訓「イハウシリ」のヒントになる語が、和名抄の中に有ると思う。それは「蝗娘」一名蝗娘和名伊保 無之利保の部分である。「蝗娘」又は「蝗娘」の字を頼りに諸書を検すると、名義抄に

蝗娘イホムシリ (僧下一七七)

とあり、十卷本伊呂波字類抄に

蝗娘イホウシリ

と、「イホウシリ」の形で出て来る。(ホは濁音、シは恐らく濁音)。「イボウシリ」は「散木奇歌集」「梁塵秘抄」にも見える。その後「イボシリ」(明応本・天正本)・「イモシリ」(易林本・春林本下学集)へと変化している。「伊京集」の「イハウシリ」は、右の「イボウシリ」の開合を取り違えて「ホ」が「ハ」に交替した形ではないかと思うのである。この考えが大体認められるとしても問題は、「イボウシリ」は「蝗娘」の訓であつて「桑螺蛸」の訓ではない事である。(蝗娘はカマキリ。桑螺蛸は桑の枝に生みつけられたカマキリの卵である。)

しかし、本草和名によってこの問題も解決しそうである。本草和名の「桑螺蛸」の見出しの下なる記事は、実は「一名」を冠せぬ語が小見出しで「桑螺蛸」「蝗娘」「螺蛸」を頭に三群に分れる。それを知らないで切れ目が無いから一項目と考える。従つて「桑螺蛸」の解釈として、「蝗娘」の訓「イボウシリ」を知っている人が、本草和名の如きを見て「蝗娘」即「桑螺蛸」と誤解して「イハウシリ」に「桑螺蛸」を宛てた、と考える事ができる。

以上「桑螺蛸」の訓を「イハウシリ」と読む事につき矛盾無く説明し得たと考えるが如何であろうか。「六種索引」には、「イハウレク」の見出しの下に「イハウレク」とあつて「イハウレク」と読む積極的根拠が有るのかとも思えるが今一つ真意が明らかでない。

さて、疑問訓三題として述べて来たものは、「伊京集」の作者の誤記による事、出典は前代の辞書や訓読文らしい事が明らか

かになつたと考へる。そこで、次にこの事実の意味を問題にする。右の事實は「伊京集の作者が、前代の辞書か訓読文によつて語を増補しようとした際、誤記をしたが気付かずに過ぎた。」と換言して良からう。すると「フタマガミ」「アブラヒサギ」の語、「桑蠟蛸」の字義は「伊京集当時、一応の識字者で節用集の増補を試みた程の人物のウォキヤアラリを以てして最早、誤記にも気づかぬ程したたかな古語になつて了つていた」と考へられる。この考へが認められるなら、この意味で「伊京集」は語史上の資料を提供している訳である。

7 まとめ

以上をまとめれば、「節用集は通俗辞書である」と言うのが通説である。しかし「伊京集」の場合、さのみ言切れぬ点がある。

①仮名遣は「開合」「四つ仮名」の混乱が少ない。

②漢字音の復原表記・「イ」の「ヒ」表記の如き復古性。

③二段動詞の一段化が極めて少い。

④語彙に一七%程の増補が有り、その中には「訓読文」「神名」「前代の辞書に見え中世辞書に見えぬ語」等、非日常的な語らしいものかなり多い。

の如くである。しかも、④の「非日常的らしい語」の存在は、それが「増補語」と考へられる事、②の如き復古的態度が見える事から見て、「古語の偶々の残存ではなく、伊京集の作者の態度に基く」と考へられる。

「伊京集」に於て右の如き性質を認める場合には、「(節用

集の語彙選択の)メドは所謂当節の用のためであることは当然であらう」とか「中世後期の通俗語彙集成である」と言う言葉で律し得ぬ点が出て来ると思うのである。

以上、古本節用集の一本「伊京集」を言語面から研究して、前代の辞書と比較しつつ「通俗的」とのみ言えぬ点を述べて来たが、今後この様な検討を諸本に加え、古本節用集諸本の対校が進んだなら、国語史資料として次の点が期待できる。

①中世後期の日常語・古語数千語を網羅する語彙資料として、所謂「文脈」こそ無いが漢字と意義分類による語義研究の資料としての価値。

②中世の音韻資料としての価値。

③筆写年代の比較的古い「唐音」資料としての価値。等である。

又、言語面の研究の辞書史への貢献も期待できる。古本節用集と前代の辞書との影響関係については、山田忠雄氏の大規模詳細な研究がある外は未だしい感がある。本稿でも「伊京集」と「名義抄」の関係に触れる所が有つたが、この方面は一語一語のつき合せによって更に多くの事実が出て来ると考へる。古本節用集諸本相互の関係、近世板の節用集への影響の研究にも役立つ筈である。

本稿は、古本節用集の言語研究と言う時当然必要な個々の諸本の内容に触れず「伊京集」に限定した点、不十分を自覚している。後日しかるべく稿を整えたい。

註

1、参考文献・論文

橋本進吉「古本節用集の研究」

山田忠雄「橋本博士以後の節用集研究」(『国語学』第五輯)

中田祝夫①「古本節用集六種研究並びに総合索引」

②「文明本節用集研究並びに索引」

佐藤茂「易林本節用集字部の和訓」(『福井大学文学芸学部紀要・人文科学』12号)

渡辺綱也「明応本節用集研究編」(新潟大学「人文科学研究」29号)

新村出「伊京集解題」(旧帝国図書館による写真複製のため。)

右の外、古本に関する研究一覧が、中田②の初めにある。

2、佐藤茂 前掲註1の論文65へ

3、中田祝夫 前掲書①の序文3へ

4、橋本進吉 前掲書64へ、新村出 前掲6へ

5、文明・正宗・明応・天正・饅頭屋本及び玉里本

6、奥村三雄「日本漢字音の体系」(『訓点語と訓点資料』六輯)

湯沢質幸「国会図書館蔵本『略韻』の唐音」(同右誌四十六輯)による。猶高本漢「中国音韻学研究・方言字彙」663へには中国南方音に開

音形のある点報告があるが、日本側の資料の大勢から見て、一応問題外としておく。

7、池上禎造「方」字の合音用法」(『島田教授古稀記念国文学論集』)

8、「伊京集」の四つ仮名を精査したが、中田①の研究篇に上げられた例

を出なかつた。

9、字鏡集は野口恒重氏の三本対校本(希購典籍蒐集会)

下学集は中田祝夫・林義雄「古本下学集七種研究並びに総合索引」

温故・運歩は中田・根上剛士「中世古辞書四種研究並びに総合索引」

倭玉篇は中田・北恭昭「倭玉篇研究並びに索引」による

10、「日本国語大辞典」小学館

11、佐藤茂の前掲論文63へに「特に(名義抄の)〈端〉の訓はさきの伊(伊京集)と相通ふものである」とある。

12、散木奇歌集・雑下「引きかへの牛の、この外にちいさくて瘦せて、

引かざりしかば、いほうしりとつけて笑ふほどに」梁塵秘抄二「をか

しく舞ふものは(略)囉せば舞ひ出づるいほうじり、かたつぶり」

13、佐藤茂 註2と同所

14、中田祝夫 註3と同所

15、山田忠雄「節用集と色葉字類抄」(『本邦辞書史論叢』)

追記

末筆ながら、本稿をなすにあたって御教示を賜った奥村三雄先生、文章を御批正下された添田建治郎助手のお二方に對し深甚の謝意を表する。

受贈雑誌 47年10月〜48年6月 ②

国語国文学(東京学芸大) 7/都大論究11/国文学研究(早稲

田大) 48/49/學術研究(早稲田大) 21/演劇学(早稲田大) 14

演劇博物館蔵書目録18/国学院大学紀要11/国学院雑誌784

792/国学院大学日本文化研究所紀要30/31/国学院大学日本文

化研究所報9卷5/中央大学文学部紀要31/32/中央大学国文16

/日本文学(明治大) 5/明治大学教養論集75/研究年報(学

習院大) 19/国語国文論集(学習院女子短大) 2/日本大学人

文学部研究所紀要15/国文学論集(上智大) 6